第2号 崋山会報
平成11年3月11日
財団法人崋山会

渡辺崋山の桃源郷

京都造形芸術大学長、岡崎市美術博物館長
芳賀　徹

私はむかし『渡辺崋山―優しい旅びと』という本を書いたことがある（現在は朝日選書）。そのときはじめて崋山のさまざまな旅日記を読み、旅の写生帖を眺めた。いずれも崋山のいきいきとした感覚の働きと、武士としての自省の深さと寛容な風格とを手にとるように伝えていてすばらしい作品だが、そのなかで彼はしばしば桃源郷を想起し、これに言及している。このことに気がついて、桃源郷研究を志す私はとくによろこんだ。

一つは天保二年（一八三一）秋、主君三宅友信の生母お銀さまを尋ねて相模の国の小園村に入っていったときの記述である（游相日記）。大山街道をはずれて、道を訊ね訊ねして田舎の細径をたどってゆく。「誠によはなれたる片いなかにて、都の空もおもひ出られて、何となう物かなしく、たゞ木くさの香ひたかく、冷風人をうつ。かくしつゝゆくほどに、鶏犬の声遥に聞え、めしたく煙、麦搗音、都にめづらかなるこゝちして、又よろこばしうなりにたり。唯先いそがれて、はしり行。」そしてついに、ここそいまは農夫の妻お銀さまの家というのに足を踏み入れると、前庭には粟などが干してあり「犬鶏ゐ守りて、かの武陵（桃源）ともいふべし」と彼は書く。

もう一つは、同年冬、同じく三宅家発祥の地の調査のために、上毛桐生への旅から熊谷の在の三ケ尻村に廻ったときのこと。その記録『訪瓎録』に崋山は、ここが豊かな田園で「民間有余不足の患なく」「桃源聚落の如し」と書き、「桃源」の字にみずから「ヨキイナカ」と振り仮名をつけている。そして三つ目は天保四年（一八三三）の『参海雑志』。伊良湖崎から神島に渡ったとき、その島の島民たちの心ばえのよさに心動かされて、「まめやかに素朴なればいにしへのみたからといふべし」「かの桃源に入りし漁夫もかくやと思ひ出しなり」と書く。

崋山は徳川知識人の一人として陶淵明の「桃花源記」に親炙し、桃源を一つの理想の小世界と考えていたのである。そして武士為政者として、日本の民衆が桃源の幸福を享受していることをよろこび、その幸福を保障する責任をひそかに感じてもいたのだろう。桃源国日本がしだいに危機にさらされてゆく時代でもあった。残念ながら画家崋山には「桃花源図」という作はないらしい。だが崋山が描けばどんなふうに描いたか。それをあれこれと想像するのはまことに心たのしい。

田原町博物館

東銘・西銘

田原町教育長（博物館長）
鈴木啓之

平成五年四月に開館した田原町博物館も、やがて六巡めの春を迎えようとしています。ご案内のように当博物館では、幕末の先覚者として、歴史上、美術史上に高い評価を受けている渡辺崋山先生の資料作品を中心に、先生と関わりの深い師友の方々の作品を収集して企画展や特別展を開催し、町内外の皆様に広くご観覧いただいています。昨年八月末には、二十万人めの入館者をお迎えすることができました。

私はこれまでに、崋山先生の作品については、人物画や山水画など絵画の美術作品の面のみに目を奪われていたものですが、平成十年三月に山内家所蔵の崋山作品の中から『東銘屏風』を、そして十二月には竹内家所蔵品の中から『西銘屏風』を拝見することができて、崋山先生を書という面から新たに意識いたしました。

この『東銘・西銘屏風』は天保九年（一八三八）九月、崋山先生四十六歳の文によるもので、二曲一双（各縦一三一センチ、横五九センチ）の一対の屏風となっています。東西の銘文は宋の張載が書斎の東西の窓に掲げた文章で、東窓の銘は言行を謹むべきことを述べ、西窓の銘は仁道の原理を明らかにしたものであると、その謂れを伺いました。書をしたためた当時の崋山先生の気迫が一字一字から伝わってくる思いがしました。山内、竹内ご両家のご好意で、この一対の貴重な屏風を博物館の収蔵品に加えることができました。

今年の九月二十九日から十月三十一日まで「渡辺崋山の書」のテーマで企画展の開催を予定しています。いま、小澤耕一先生にご解説をお願いしているところでございます。多くの皆様にご観覧いただけることを期待しています。

東銘屏風

西銘屏風

目次

題字「崋山会報」崋山会理事　小澤耕一
P① 渡辺崋山の桃源郷　芳賀　徹
P② 田原町教育長・目　次
P③ 画家渡辺崋山の心象
　国宝『鷹見泉石像』
P④ 華山先生略伝補　(1)
P⑦ 田原町博物館所蔵品から
P⑧ 崋山史跡
　城宝寺(1)（田原町）
P⑨ 三宅坂
　（東京都千代田区）
P⑩ 紀行文『参海雑志』後編
P⑭ 各地の博物館を訪ねて
　「鷹見泉石記念館」
　「古河歴史博物館」　古河市
P⑮ 崋山史学研究会雑記
　崋山先生のやさしさ
　衣笠小学校児童
P⑯ 田原町博物館からご案内

画家渡辺崋山の心象

国宝　鷹見泉石像
東京国立博物館蔵
天保八年（一八三七）絹本著色
縦一一五・一cm　横五七・一cm

款識は「天保鶏年槐夏望日写崋山渡辺登」、印に白文長方印の「崋山」を使用しています。

この作品は、古河藩の家老で、蘭学者としても著名な鷹見泉石（一七八五～一八五八）を描いています。天保八年に大阪で起きた大塩平八郎の乱の平定に活躍した古河藩主土井利位の代理で、藩主の菩提寺浅草誓願寺に代参をした帰りに、渡辺崋山のもとを訪れた時の姿を描いたものと言われています。款記によれば、天保八年旧暦の七月十五日に完成したことがわかります。正装の麻の素襖には、抱え鹿角と楓葉の鷹見家の紋が白く染め抜かれています。腰に差した小さ刀の目貫や笄の六水車紋は、古河藩主土井家の定紋で、藩主からの拝領品を差していると思われます。

この作品の見所は顔です。顔は、濃く水分の少ない細密な墨線で、極めて素早く眉目、鬢、唇を描き、淡墨で眉下から鼻、顔の右から左にさした光に対する左側に投影された影を隈取という陰影のボカシで巧みに表現しています。顔は洋画的技法を取り入れ、頭蓋骨を意識してボリューム感を出しています。顔の輪郭部分を表す線は、その質量感に合わせてやや太くしています。折烏帽子を結ぶ紐は顔のふくらみを違和感なく伝えることに成功しています。衣線は従来の東洋画の特徴である太い線で描き、あまり立体感を出さずに、むしろやや平面的な感じさえします。この作品は今年の二月から三月にかけて日仏文化交流の展覧会である「ドラクロア　民衆を導く自由の女神」（会場　東京国立博物館）にも十九世紀を代表する日本絵画として紹介されました。

田原町博物館学芸員　鈴木利昌

華山先生略伝補（1）

田原町所蔵重要文化財の一つである「華山先生略伝補」は、明治十四年（一八八一）三宅友信七十四歳の自筆著作である。原本の形は、茶表紙和綴二三・六×一五・七糎、毛筆墨書十三丁和紙十行吾木版刷青罫紙の冊子で、表紙題箋に小華夫人須磨女史の筆で「三宅友信老公之書」とある。題名にある略伝補の補は、清宮秀堅著『雲烟略伝』の増補の意味である。下総国香取郡佐原の名主清宮利右ヱ門秀堅（一八〇九～一八七九）は、漢籍詩画を善くし、幕末十六画人の伝記『雲烟略伝』を著す。内、渡辺華山の稿は、万延元年五月の作である。三宅友信（一八〇六～一八八六）は田原藩主康友と側室於銀の方との間に生まれた子で、通称を鋼蔵、諱を友信、字を子信、号を毅斎・王山・芳春・片鉄などと称した。

崋山・史学研究会では、直接、崋山の教えを受け、又、崋山がこよなく忠誠をつくした三宅友信侯の目を通して記録された崋山の人となりを、綴られた思い出の事柄毎にまとめて、口語体で紹介する。略伝補は草冠の華山を使っている。

第一話　父と崋山

崋山先生の父は、定通（俗称・市郎兵ヱ）といい、鷹見爽鳩［儒学者　号星皐　田原藩家老］の門人であります。経学を修め、当時高弟として、三宅藩（田原藩）の学問の指導者のひとりでした。性格は剛直で、上司に対しておもねり、へつらうことなく、たびたび三宅藩の政務にたずさわるよう抜てきされて推挙されましたが、固辞してこれに応じませんでした。後になって老中に列席しましたが、三宅康和侯の時、日頃、老中の方々が古い習慣にとらわれ、その場しのぎの場当たり的なやり方で藩政が振るわず、武士道の気風が日に日に衰退してゆくのを嘆いて、君子に建言したけれどもその気持ちは通じませんでした。晩年になって、いきどおりと心配がたまって病にかかり、気短かで性急になったけれども、崋山先生は、つとめて父の意向に逆らうことはありませんでした。万事かくのごとき毎日でした。その純真な親孝行ぶりには、みなさんが感服していました。私は直接その姿を目撃していたのであります。

父が亡くなって、喪に服すること厚く、佐藤一斎先生の書かれた『喪祭篇』によって、おおよそ儒家の葬礼にのっとり、極めて丁重に愛敬の意を尽くして喪に服されました。私は直接その姿を目撃していたのであります。

三宅友信像

第二話　真摯な心と指導力

先生は、善く人のやる気を奮い立たせ、果たすべき義務を奨励されました。怠け者で品位の悪い人といえども、話をしたり、笑い話をしている間に相手のやる気を鼓舞し、薫陶をうけて自ら正しい道により物事を遂行して行く人々も少なくなかったようであります。ことに年少の人々には、文学の勉強を奨励したけれども、また、よく武芸の奨励もなされました。

三宅藩では、従来、撃剣の技は、直心流を伝え、いわゆる、形の剣術として、あまり意味もなく心胆を錬磨することを要旨として、決して、臨機応

変に対処する術ではなく、その実用の面で益するところ少ないことを悟り、藩士たちがひ弱で無気力になることをおそれ、当時の剣客であった杉山大助、斉藤弥九郎等にお願いして剣術を教授させました。両人は、いずれも一刀流の剣客で、このことにより、三宅藩の武士たちは、撃剣の厳しさを知り、以前の意味のない偽りの形式だけの技は一変しました。

又、高島四郎太夫［秋帆、西洋砲術家］を訪ねて、西洋銃隊及び大砲の砲術を学び、その奥義を極めて、当時、東海地方で西洋砲術を身につけたのは、村上氏［田原藩士　村上範致］が最初でありました。このことによって、村上氏の名声は広く行き渡り、宇和島侯、西條侯等はその臣下に命じて、その伝術をこいねがい、田原にやってきました。田原近郊の防備についてその名を馳せたものは、みなはじめ崋山先生がリードされたものであります。

渡辺崋山銅像（池ノ原公園）

第三話　潔癖な心

竹村悔蔵［海蔵・号悔斎］は三河の国、挙母の内藤侯の家臣で、佐藤一斎の高弟であります。性格は、人に束縛されず大変優れた学識の持ち主で、記憶力抜群であり、幼少より神童とうたわれていました。（十二歳の頃、林祭酒（林述斎）についてその詩賦を朝鮮の外交使節団に示し、外国人がみんなその奇才を感嘆したといわれる）

内藤侯の邸は、麹町のわが邸宅の隣接していました。悔蔵は暇さえあれば必ず先生を訪ねきて、一日数回に及ぶこともありました。最も深い親友でもありました。竹村氏がある時、一日中訪ねてきていうことには、「余藩の老臣で執政の津村佐次輔という人物は、勝手気ままな専横ぶりが目に余る物があり、私利私欲にはしって公を悔辱している。私はわが主君のために、大事をおこなわん。」と告げました。先生は、竹村氏の義憤を感じ、氏の決断の心意気を察して、賛同してともにその志を語り合ったといわれます。竹村氏が立ち去るとき、先生は、竹村氏を邸門の外まで送り、深く永訣の気持ちで悲しみをこらえて送ったといわれております。私は、幼年の時であり、窓のそばでこの時の様子をうかがっておりました。その日の夕方、竹村氏は、本邸の外に津村氏を呼びだして殺害し、家に戻って割腹しました。

先生は常に良友の死を深く悲しみ嘆いておられました。しかしながら、その義理ある行為については、いささかも嘘偽りのない行動としてとらえておられました。まさに先生はかくのごとくでありました。

第四話　母を思う心

天保の頃、外敵を打ち払わんとする攘夷の考えが広まってきました。藩内に海のある諸藩は、それぞれ武具を整え、我が藩も又甲冑や刀、槍等を整備しました。いつぞや先生が市街を見て歩き、たまたま骨董品店に中古の甲冑をみつけ、これをよく見てみると、頗る古色を帯び、乾いた血がにじんでいました。先生はこれを商人にたずねてみたところ、この甲冑は、関ヶ原の戦いの時の物であるとのことでありました。先生は大変喜んで、なにがしかを払ってこれを買い求めてきました。いつもこれを寝室に置いて、朝夕に血のにじんだ

ようなこころを磨き、実際に活用された本物であることを自慢して、数日の間、人が来ればこれを見せて、言葉の端はしに、私はまれにみる貴重な武具を手に入れることができたと誇らしげにいっておられました。思うに先生は、藩士たちがみだりに武具を飾り立てているのを戒めるお気持ちがあったのではないかと思います。ところが、たまたまご母堂がその部屋を窺ったところ、血のにじんだような古い甲冑のあるのを見て驚き、たしなめていわれました。あなたはこの汚いよごれた物を買ってきたのですか。恐らくこれは古戦場での野ざらしの死体からとってきた遺品でしょう。どうしてあなたは、このような不祥物を貯えておくのかと、袖を振って忌み嫌い、立ち去って行かれました。先生は、即日、その古い甲冑を脇に抱えて持ちだし、売り戻して来ました。ご母堂は大変喜ばれました。常日頃、先生はご母堂の言うことをよく聞いてこれに従うご様子は、だいたいこのようでありました。

第五話　寛大な心

先生、昼の長い酷暑の時でも、未だかってうたた寝をすることはありませんでした。たまたま人が真昼からうたた寝をしているのを見ると、ねんごろに諭されました。私もしばしばこの注意をうけたことがあります。

先生は、常日頃、ご自分の家の内でも、未だかってどなるということはみうけられませんでした。かって、ある侯より賜った珍しい古墨を持っておられ、これをいつも絵を画く机の上に置かれて大切にしておられました。ある時、九十歳の齢を重ねた祖母が、その机上の墨をとって、どうしてこのような木炭を机上に飾るのですか、といってこれを取り、庭に出て石に打ち当てて壊し、それをひばちの中に入れてしまいました。先生は、かたわらでこれを見ておられましたが、大笑いをしてこれを止めることをしませんでした。いささかも祖母の齢をとがめるつもりもなく、古墨を愛惜する色もありませんでした。また、かって、稲垣侯が望まれていた大幅の色彩の牡丹を画かれ、ほぼ輪郭ができあがっていました。ところが急にご主君よりお呼び出しがあり、筆をおいて退出されました。私に牡丹の枝葉の裏側に白緑の下塗りをしておくようにいわれました。私はもとより軽率で、白緑の色を花弁のうらにほどこしてしまいました。私は、首筋を叩いてその過失を恥じらい恐縮していました。この大幅画は幾度も汚くしてしまったのですが、先生は用向きを終え、帰られてこれを見られ、いささかもその過失をとがめることなく、ほほえんで筆を取られてその痕跡を直されました。その寛大なお心持ちはいかばかりかはかりしれませんでした。このようなことがたびたびありました。

研究会員（愛知県立作手高等学校長）
山田　哲夫

田原町博物館所蔵品から

重要美術品　渡辺崋山筆牡丹図
天保十二年（一八四一）紙本著色
縦一二三・五cm　横四七・五cm

蛮社の獄後、在所蟄居の判決を受けた崋山は、田原の地で幽囚の日を送る身となります。崋山の画弟子福田半香（はんこう）らは、江戸で崋山の絵を売り、その収入によって恩師の生計を救おうとしました。この図は、その半香の義会の求めに応じて描いたもので、天保十二年に描かれ、評判となり、「罪人身を慎まず」との世評を呼び、田原藩主三宅康直（みやけやすなお）に災いが及ぶことを畏（おそ）れた崋山はついに死を決意することになり、「腹切り牡丹」と称されたものです。

この図は、没骨（もっこつ）法という技法で描かれています。

これは、輪郭線（骨法（こっぽう））を描かずに、水墨または彩色で対象を描き表す技法です。崋山は、陰影や遠近感を表現した西洋画の技法を取り入れた文人画家として評価されますが、没骨法という東洋画の技法もよく研究しています。鎖国下の江戸時代で、情報的に最も豊富なのは中国で、武士の教養としての儒学はもちろん、絵画として唐・宋・元・明の間に著された中国の画論・画史の書を入手して、研究を重ねていました。賛に「牡丹は墨を以てし難し、墨を用い以て浅きは難し、淡々たる胭脂（いんし）を著し、聊（いささ）か以て俗眼に媚びる」とあります。この意味は、「牡丹は水墨で描くのは難しい、墨を用いて浅く牡丹の濃艶な趣きを描くことは難しい、淡々としたべに色を用い、いささか俗人の眼に入るような牡丹を描いた」というところでしょう。賛文の後に朱文方印の「渡辺登印」が押されています。また、この作品に付属の巻止には、旧所蔵者であった林董氏（はやしただす　一八五〇～一九一三）によって書かれています。董氏は、香川・兵庫県知事を歴任後、明治三十五年の日英同盟の締結交渉に外交官として活躍、同三十九年には、第一次西園寺内閣の外相となり、日韓・日仏・日露協約の締結にあたり、その功により伯爵に叙せられます。この作品は、昭和十五年九月二十七日に重要美術品の認定を受けています。

田原町博物館学芸員　鈴木利昌

崋山史跡

城宝寺（1）（田原町）

城宝寺は、三河田原駅から西方へ、徒歩1分の場所にあります。この通り沿いには城宝寺をはじめ、宗派の異なる寺院が4つ並び、寺下通りと呼ばれ、城下町の景観を残しています。寺には、崋山の墓所やゆかりの品々があり、崋山を偲ぶ人々が、数多く訪れています。なお、城宝寺については、2回に分けて紹介します。

天保12年10月11日、池の原で自害した崋山は、その日のうちに藩医師中村半節、中村亦寿の検死を受けました。その時の検死書控えがここに保管されています。検死書の控えがあるのは、中村らが城宝寺の檀家だったためと考えられます。

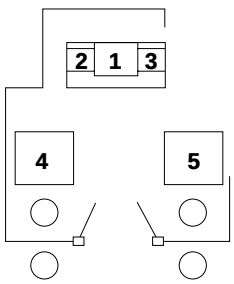
11月5日、崋山の亡骸は、幕府の検死を受け、翌6日に城宝寺の墓地に仮埋葬されました。崋山がここに葬られた理由はわかりませんが、この寺は武家の檀家が多かったこと、また渡辺家菩提寺の東京の善雄寺と同じ浄土宗であったことがその理由として考えられます。埋葬場所は、藩の重臣市川家、村松家墓所の間の空いた場所でした。崋山が自殺前に「罪人石碑相成ざるべし因自書」と認めたように、当初墓碑は建てられず、後に娘婿松岡次郎によって「崋山先生渡邊登諱定静字子安之柩」と彫った銅票が埋められました。

没後二十七年、罪科赦免となった明治元年8月、ついに息子小華によって墓碑が建立されるに至りました。

境内には県史跡の城宝寺古墳があり、その墳丘上には元禄13年建築の弁天堂があります。ここには以前、崋山の天井画があったと言われていますが、損傷が激しくなったため、明治37年頃、小華ゆかりの画人、長尾華陽をはじめとする7人が花鳥画を描きました。現在、この絵は取り外され崋山霊牌堂に展示してあります。

古墳裾には昭和39年、田原吟社により太田鴻村の「紅椿魂極まりし慎機論」句碑が立てられています。

崋山の墓所は、古墳の西側にあります。鉄扉には渡辺家の紋「兜貝」が彫られています。中央の「崋山先生渡邊君之墓」と刻まれた背の高い墓石が崋山の墓です。向かって左には妻たか、右には母栄の墓が寄り添っています。手前左側は息子小華、右側は小華妻須磨の墓です。



崋山墓所配置図

1 崋山 「崋山先生渡邊君之墓」
2 たか 「崋山先生配和田氏之墓」
3 栄 「巴洲先生配河邨氏之墓」
4 小華 「小華渡邊先生之墓」
5 須磨 「文操院貞誉心子大姉」

昭和4年、墓所の正面右側に萱町青年会が有志の寄付によって「見よや春大地も亨す地虫さへ」の石碑、灯籠一対及び石柵を整備しました。この句は崋山の自伝である「退役願書」に記されているものです。

その右には昭和30年、崋山先生顕彰会が本堂奥に霊牌堂を建設した時の記念碑が立っています。鉄扉と正面石灯籠一対は昭和27年に建てられたものです。

（次号に続く）

研究会員　中神昌秀　増山禎之

三宅坂（東京都千代田区）

渡辺崋山は寛政五年（一七九三）九月十六日に生まれました。その生誕の地が、今回の「崋山史跡」として紹介するこの場所です。

ここ、三宅坂は東京都千代田区にあります。周辺には最高裁判所・国立劇場・国会図書館・憲政記念館などのほか、かつての江戸城の堀を隔てて皇居の緑が眩いばかりに目に飛び込む、東京の中でもその中心に位置するところです。

そこには、左の写真のような案内板があります。千代田区教育委員会が管理するもので、「渡辺崋山誕生地」とあります。そして、崋山が三宅備前守藩邸内に生まれたことが記されています。

「渡辺崋山誕生地」の案内板

崋山の父は、渡辺家の第六代にあたり、市郎兵衛定通といい、母は、栄といいました。しかし、共に渡辺家の嗣子ではなく、定通が叔父の家の養子となっています。

崋山はこのような両親の間に、長男として誕生しました。家族は田原藩の上屋敷内で生活していたため、ここが「誕生地」となったわけです。

三宅氏は寛文四年（一六六四）から三河国田原藩の藩主となりました。それまで田原藩主であった戸田氏が肥後国天草富岡へ転封となり、そのあとへ三河国挙母から三宅氏が入封しました。

その三宅氏は挙母時代から下谷に三千二百六十四坪の上屋敷を拝領していました。また、延享二年（一七四五）には自らの希望で芝愛宕下の江戸見坂に上屋敷を移しています。

そして、宝暦十二年（一七六二）に三回目の屋敷替えがあり、麹町半蔵門外の屋敷、今回のテーマの三宅坂に上屋敷を拝領しました。ここは二千九百五十六坪の、江戸城の堀沿いに位置する格の高い屋敷でした。

右手が旧上屋敷

なお、三宅坂の地名の由来は、やはり、ここに三宅氏の上屋敷があったことに起因する説が有力で、国会議事堂の正面から、皇居の堀を右手に歩くと、緩やかな上り坂が続いています。

明治四年（一八七一）七月に廃藩置県の勅書が出ると、この屋敷は新政府に返上しました。その後、明治十六年に作製された中央官衙街の地図をみると、軍医本部と東京陸軍病院の敷地内となり、病院の施設が建っています。

大正八年（一九一九）になると、この地区は市街地建物法と旧都市計画法によって規定される「東京美観地区」に指定されます。また、新たな建築物を造る際に「軒高海抜百五十尺を超過する建物の事前協議を要する区域」として宮内省との事前協議区域を要する地区となりました。エピソードとして、桜田門外に建設中だった警視庁の庁舎はこれに触れて、最上階のドームが撤去されました。

現在では、田原藩の上屋敷のあったところには、最高裁判所の重厚な建物がたっています。

現在の三宅坂、背後には最高裁判所

研究会員　林　哲志

紀行文 参海雑志 後編

私たち主従三人は、島の磯辺に立ち、帰っていく船を眺めて、何となくもの悲しくなってしまった。あの俊寛がそのようにするのも推測ができるというものである。しかしながら、罪が無くて配所の月を見るのは、またこの上ない喜びであるので、こういう状態も本当の気持ちではない感じである。

又左ヱ門という者は、この島の長で、和地の威福寺から連絡してあったので、この家を頼って長流寺という所に宿泊しようと、まず又左ヱ門の家を尋ねた。

そもそもこの島は廻りが一里強で、大洋の中に押し出していて、鳥も通わない絶海の孤島である。大磐石辺を根として大きな山となっている。これを燈明山という。この他に小さな山が六、七峰もあるだろうか。一足も置くことのできるような平地は無いので、谷の間から磯辺にかけて、人家が所狭しと建て並んでいて、およそ百軒もあるだろうか。常に風の心配があるので、皆瓦屋根であって、ひとつも草をもって屋根を葺いているのはない。

又左ヱ門は奥の方に住まいがあって、私が到着したのに驚いた様子である。案内する者がいうのに、「これは田原よりお出でになったお客様です。和地の威福寺から長流寺という所に宿泊しろといって連絡があった。」手紙をだしたので、又左ヱ門もたいそう喜んだ様子で、「それなら、安心だ。まずこちらへお通り下さい。」と、炉の近くに迎えとって、お茶やたばこ盆などを出す。

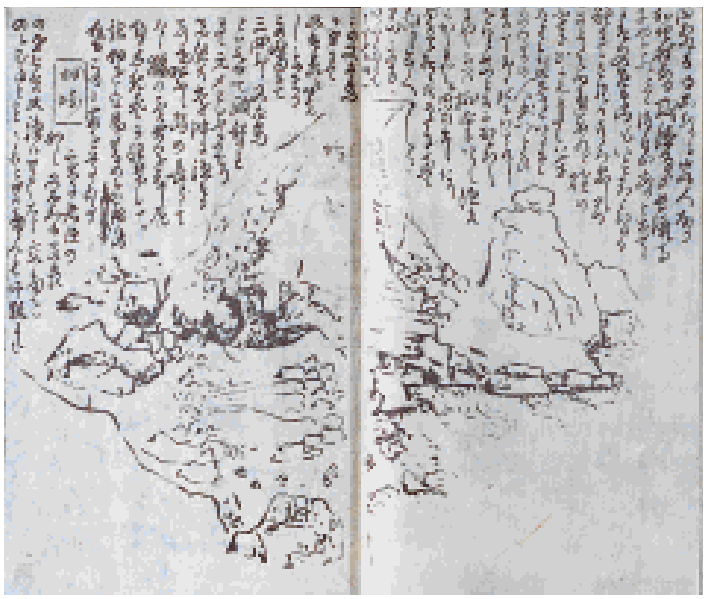
この辺りの人々が集まってきて、私がここに着いたのをたいそう珍しく思ったのであろうか、あの桃源に入り込んだ漁師もこんなであったのだろうかと思いだしたことである。

やがて、奥の方に畳を敷き並べて、「どうぞ、こちらへお入り下さい。」といったのは、この又左ヱ門の弟で又右ヱ門という者である。

この島で、三四郎・又左ヱ門という者は、網船の主で、元締と言うものである。先祖より遠くの沖で漁をすることを禁じ、島の長としてただ猟の売買をして、尾張・伊勢・志摩・紀州・三河を往来し、いろいろな物を交易するだけである。島の人がこの二家を貴ぶことは、実に主君と家来の関係のようである。

又右ヱ門も、その長の弟であるので、また漁はせずに、ただ交易だけを主としてやっている。しかし、世間の商人はずるがしこく、たいそう腹黒い者であるが、この者たちは誠実で、素朴であるので、昔のお宝ともいうことができる。私が言う。

「この島のひとの漁は、大洋の二、三十里も外へ漕ぎ出して釣りや網を入れたりするので、あのイギリスなどという黒船は見掛けることはあるか。」皆言う。「そうですね。唐船が流れ漂って我が地に漂着したものは、近年、長崎に送ったことはあるが、その黒船というものはたいそう稀であ



海岸岩山の図

る。ただ遠くの沖を通るだけで、どのようなものかよく知っているものはございません。これは鳥羽侯の厳しい御命令があるので、また迷惑だ。」といい紛らわすようである。

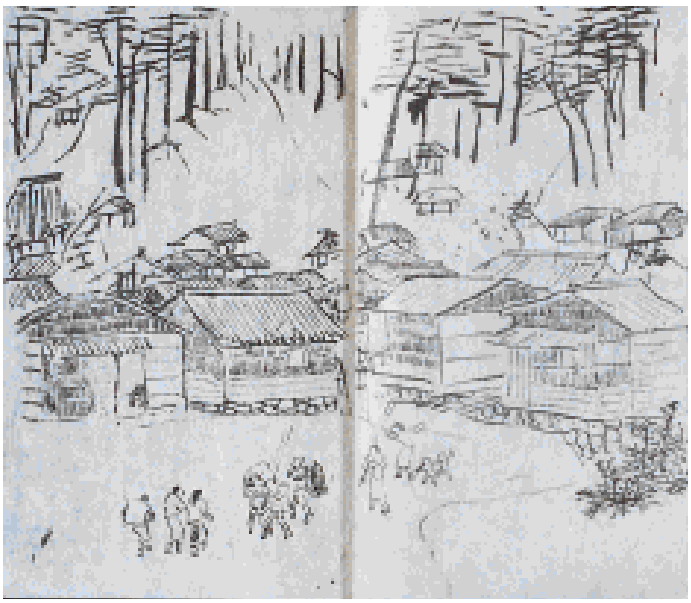
酒と飯とを出す。酒は飲むことができる。ただ飯のほうは砂や石が混じっていて旨くない。肴はサハラの刺身、アイナメという魚の煮た物、鮑の酢に浸けたもの、皆旨く食べることができる。

鈴木氏も私も、船に揺られたからであろうか、頭が重く、胸が痛く、ただもう酒ばかりが頭に上って、眠けばかり催してくるので、枕を引き寄せて横になる。田原は蚊が多くて蚊帳を吊っても、なおも防ぎ難い程なのに、この島は蚊と盗賊の心配がないので、気持ち良く寝入ってしまった。

十七日　晴　目が覚める。窓の外に雪駄の音がする。たいそう珍しいので戸を引き開けてみると、島の人たちが海の様子を見に出ているのである。この雪駄を用いるのは、牡蠣の殻が多くある土地であるからだということである。

磯に出る者は、足半（あしなか＝踵のない短い草履）を履いて走る。女はみんな赤裸で、褌ばかりで腰を被い、その仕事をする。家にいる時は、半纏（はんてん）とかいうもののような、または、襦袢というものに似た衣で、長さはわずかに腰のあたりに達するほどである。伊勢の松坂で採れる『島木綿』でつくり、襟と袖口とに赤い木綿の布をつけている。又、更紗もようのある布をもつけてある。

私が泊まった又左ヱ門の娘は十七、八であるが、襟に更紗をつけて、袖には赤い木綿をつけていた。その上にまえだれというものを結び、帯を締めたものを見ない。



村落風俗の図

髪は、老人・少女わけ隔てなく、江戸でいうところの島田であって、髪に飾りを用いることはしない。これは皆あわびや海草を取りに海に入るためであって、生活の上からこういうことになるのであろう。

おおよそ、この島の人は、男は素朴であって、偽るところがなく、女はたいそうこころやさしくて、江戸の女の賤しいのが勢い盛んなのにはるかに勝ってなかなかすばらしく見えた。

やがて、たばこを燻らせながら、海の朝日の出るのを見ようとして東の磯に出かけた。早くから起きて、磯草を乾している女に案内させて、白い巌で家よりも大きなのが聳え出ているのに攀じ登ってながめる。

『はてしなき海原の大空につらなりて横雲の赤く紫にたなびきたるさま、波のみどり深く黒みたる西人の称する大東洋にして、かの亜墨利加とかいえるわたりもこの海原よりつらなれりと思うに、まことによの外の思ひを生じ、しばしながむる間、越戸・小塩津の山とも見ゆるかたに、丹塗りの盆にこがねの針うえたるやうにゆらゆらとさし登る旭の光は、紺碧の波を射て畫にも口にも及がたきありさまなり。』

私と鈴木氏とは、ただもうあきれてしまって、一言の腰折れ短歌をも歌えない。このような景色

を都の人に見せたなら、吉原の花もさかいてうの□□も見どころはないようだといっているうちに、又左ヱ門の使用人が朝食の準備ができて呼びにきた。ここで見ほれていては宿の都合も悪いだろうと、いっしょに宿に帰った。

飯を勧める。飯は炊きおろしたものでたいへん熱い。しかし、石が多くて、歯に当たり、食べにくい。菜は香のものばかりが味がよい。米がよくないので、喉に通らず、お茶をかけて、目をつぶって飲む。

又右ヱ門が出てきて言うに、「兄又左ヱ門は人別帖を整え、朝早く鳥羽の役所へ行きました。御客様の良きようにおもてなし申し上げろと言って出ました。今日は、島山をご覧下さい。御案内申し上げましょう。」と言う。

やがて、また飯を出す。これがほんとの朝飯である。平汁と焼物である。皆魚の肉で、汁はわかめを使っている。ようやくこの飯が喉に入る。

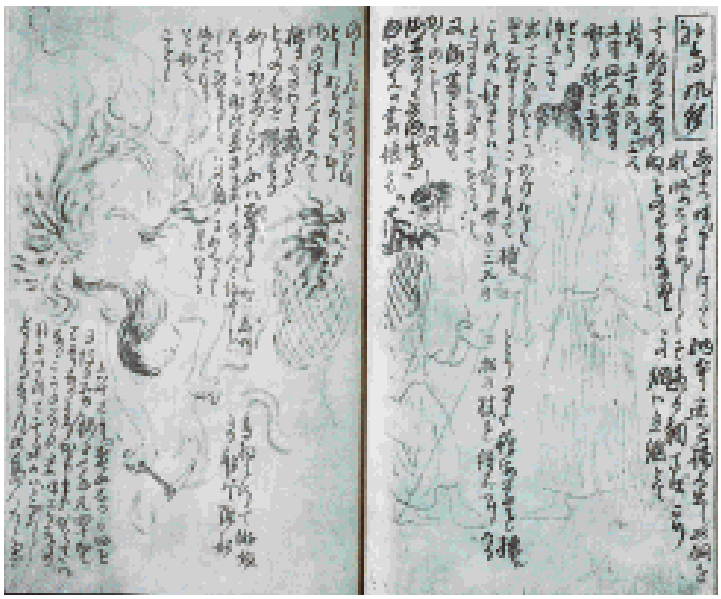
磁石・遠眼鏡などを持って、又右ヱ門の後について出発する。これは辰の下刻（午前十時）ごろですでに巳（午前八時）に近いころである。

浜辺に漁の船が帰ってきたと言う。行ってみると、又左ヱ門の船であった。又右ヱ門の妻も娘も、群がる海女の中に交じって、網から魚を捕らえ出したり、又網を乾して収納したり、かいがいしく働く。

神島船をあぐる図

魚は鯛・鯖・こち、その他は見慣れないものばかりである。

この網は立網といって、長さ三十五尋（約六十四メートル）巾三尺五寸（約一メートル）、四人乗りの船に積んで、三里程沖へ漕ぎ出して、夜のうちにかけておき、翌朝未だ明けないうちに漕いで行って捕らえるということである。

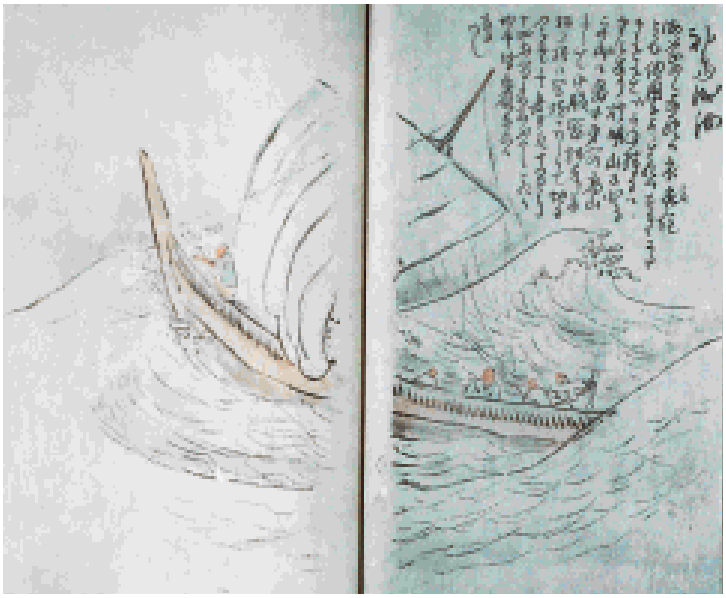


神島風俗の図

また、稚海草（ワカメ）を採る。これは、船では長い竹の先に三叉の松の枝を結びつけた物にからめて引き上げるのである。また、海帯（昆布）を採るのもこのようにして行う。

また、海士がいる。この島は漁夫の妻や娘どもだけがこれを仕事として、恐ろしい荒海の中へ潜ってとる。その技は、あたかも鵜という鳥が魚を捕るようである。

おまつという女は、若かった時は志州の鳥羽で遊妓であって、船頭某に妻となる約束をしていたが、この船頭が船で難破して死んでしまったので、また島に帰ってきて、海士となり、その技が実に巧みである。今年六十ほどの老女であるが、毎日得るところのお金は、一年でおよそ四十金（約二・五両）ほどであるということである。このようにたくさんのお金だが、米、味噌などの用に使って、その身はたいそう貧しく暮らしているのである。



神島渡海の図

およそ、この島の人は、ただ魚や海草だけであるので、衣食住とも他国に頼らなければやっていけず、小金を持っているのは希である。

燈明山へ登る。この山は島の中で最も高い山であって、中腹はみな松である。その長さはおよそ十間から十四、五間にも及ぶようである。これは地中がみな巌であるからなのであろう。

十八日　空　曇り　風なし。

畠村を出て、川に沿い、小田というところから船に乗る。この地は戸田淡路守殿の領地であって、陣屋は畠村の高台にある。

やがて、海の中に出る。左右みな平らな砂である。殊に中山の砂は三里、小田（古田）の方もおよそ一里ほどもあるだろうか。

今日は空がうすぐもりで、髪の毛一本動かすような風もない。海面は鏡のようで、まことに旅の途中の素晴らしさの一つである。

鮫がいて、船を追い、背中をあらわして鳴く。私が恐れると、船子がいう。「この鮫はスサメといって、身長およそ七、八尺もあるでしょう。このあたりにもっとも多い。捕らえて食べても味がないので、鮫もまた居場所ができて、あのように櫟の木の実が散らばり殖えるように繁生したんだろう。こういう訳で、この船の通るのを喜び、このように後を追って来るんだ。」

神島図

秋の半ばになると、鯨が鰯を追って、この海に入ってくる。しかし、この鮫のように人に馴れず、船を見ると深く海の底に潜ってしまって捕らえることはできない。そういうことで、この海の深さはいく尋あるかわからない。浅い所は水底まで透き通って真砂まで数えることができる。（略）終

研究会長　渡辺亘祥

各地の博物館を訪ねて
「鷹見泉石記念館」「古河歴史博物館」

古河市中央町三丁目10番56号
（〇二八〇）二二一―五二二一
交通　ＪＲ宇都宮線古河駅下車
　　東武日光線新古河駅下車

古河市は茨城県の最西端にあり、西には渡良瀬川、南には利根川を境にして栃木、埼玉、群馬県と接しています。古河は、『万葉集』巻十四の東歌に「まくらがの許我」、『吾妻鏡』に「古我」とあります。十五世紀の半ば、鎌倉公方の足利成氏が享徳の大乱を起こして鎌倉を離れ、本拠地を古河に求め、以後、古河公方と呼ばれ、五代百二十年余にわたって在城しました。江戸時代には交通の要所として、幕府の大老や老中を勤めるような有力譜代大名十一家が交替して配置されます。また、将軍が日光東照宮参拝の宿泊場所にしていたこともあり、奥羽街道、日光街道の宿場としても発展します。

鷹見泉石記念館

古河歴史博物館

古河城は、一部の堀と土塁を残して主要部分は河川敷になってしまいました。古河市内には江戸時代からの武家屋敷や商家、藩主土井家歴代の墓所がある正定寺をはじめとした由緒ある寺院も数多くあります。ＪＲ宇都宮線古河駅から十分ほど歩くと、鷹見泉石記念館と古河歴史博物館のある古河城出城跡があります。

渡辺崋山が活躍した江戸時代後期には、古河藩では蘭学を中心とした文化が花開きます。その中心人物が、古河藩江戸家老鷹見泉石（一七八五～一八五八）です。泉石は、古河で生まれ、幼い時に古河藩蘭方医河口信任の影響で西洋の学問に興味を持ったと伝えられています。洋学の知識を深めてゆく過程で、同じ立場の譜代大名の家臣で、江戸定詰の家老を勤める渡辺崋山と交流を持ちます。その泉石が晩年、蘭学研究に没頭した住居を改修したのが、鷹見泉石記念館で、この館は、博物館とは、噴水を配した堀と道路を隔てて、南側にあります。記念館の門をくぐり、踏石づたいに敷台まで歩を進めると、四畳ばかりの玄関の奥に「泰西堂」という十畳の書斎があります。さらに右に進むと十畳と五畳の続き間で、右奥に六畳と八畳の部屋があります。他に台所と手洗所がついています。屋敷内の庭に楓樹という木があることから、屋敷は「楓所」と呼ばれていました。なお、博物館は、展示のテーマを鷹見泉石と洋学・古河の歴史・古河の文人たちという構成で、展示しています。特に展示室では、鷹見泉石の人柄と研学の多様性を鷹見家資料で、わかりやすく展示しています。鎖国という閉ざされた環境の中で、海外情報を求めて洋学に打ち込んだ泉石の先見性を垣間見ることができます。城下町を感じさせるかぎの手になった道をしばらく歩くと、周辺には、泉石の生家があった古河市立第一小学校や、博物館の別館として、全国でも珍しい篆刻美術館と古河街角美術館もあります。

田原町博物館学芸員　鈴木利昌

崋山史学研究雑記

研究会員　尾川　新一

私は、成章中学十五回生。昭和八年の卒業である。在学中は、毎月十一日（崋山先生の命日）には、全校生徒そろって池の原公園へ出かけ、「崋山先生玉碎之趾」碑の前で、深ぶかと頭を下げたものである。

就職して生活に追われている間は、特別深く考えてもみなかったが、さて、定年退職して、じっくりと崋山先生の人物像、事蹟等について考察してみると、自分の理解が①備前池田候若君との出会い、②板橋の別れ、③慎機論・蛮社の獄、④自刃のことくらいで、ほとんど誰もが知っている常識の域を出ていないことに気付いてがっくりした。

その頃、町に「崋山史学研究会」なるものが存在していることを聞き知ったので、早速、会員に加えていただいたのが「崋山史学」との出会いである。もう何年になるだろうか。現在、会員中の最高年齢者であって、頭の方が追い付かず、四苦八苦しているのが偽らざる告白である。

会員の中には「成章」の同窓生も多く親近感もあり、年寄りをも温かく受け入れて下さるので、心地良く勉強させてもらっている。

中で、最も感心することは、皆さんが、「崋山先生」について実によく研究されていることであり、この点老骨など足元にも及ばず、穴が有ったら入りたい位の気持ちである。

今は、勉強に使った貴重な資料もどっさり本箱に収まっている。会員の皆さんは、人格・識見ともに秀でた方ばかりで、これらの方々と同席するだけでも、素晴らしい収穫と喜んでいる。

願わくば、田原町の若い層の方々がもっと多く会員になられ、郷土の、いや天下の偉人であり、偉大なる画家としての「崋山先生」の事蹟を研究、発表し、十二分に遺徳を偲び、継承されんことを祈るものである。

崋山先生のやさしさ

衣笠小学校　六年　河合淳一

崋山先生のことで知っていることといえば、有名な画家だったということです。画家として有名だから生活は裕福だったと思っていました。ところが、そうではありませんでした。

崋山先生は、人のために絵を描いても、ほんの少しのお礼でよいと言うのです。だから、暮らしは、いつもきりきりでした。ぼくなら、家のためにもっとたくさんのお金を貰うのに。

また、崋山先生は、昼寝をするくらいなら勉強や仕事をするというほどだったそうです。先生のえらさが幕府にも分かって、四十歳の時、海防事務官というりっぱな仕事につきました。出世してからも、ますます勉強して世の中のため、人々のために尽くそうと、自分のすい眠時間を減らすほどでした。

こんな、やさしくて勉強家の崋山先生は、もっと西洋の勉強がしたくて長崎に行きたいと考えましたがなりませんでした。高校の受験に失敗したようなくやしさだったに違いありません。

ところで、博物館で展示やビデオを見ても、「先生がどうして、自殺したのか。」納得いきませんでしたが、『渡辺崋山少年物語』という本を読んでいくうちに、その謎が解けてきました。

崋山先生は、

『不忠不孝　渡辺登』

と書いて自殺しました。さぞ、無念だったろうと思います。

自分が生きていると、みんなに迷惑がかかるかも知れないことを心配して、「でも、悪いのは自分です。」と言って、いざぎよく死んでいった崋山先生は、本当にやさしい人だと思います。

ぼくは、先生のように人に親切でやさしい人になりたいと思います。

田原町博物館からご案内

企画展のご案内

五月一日～五月三十日
田原町博物館増築竣工記念企画展
富岡鉄斎展―清荒神清澄寺コレクションから（企画展示室1・2）

富岡鉄斎筆　瀛洲僊境図
清荒神清澄寺蔵

九月二十九日～十月三十一日
企画展渡辺崋山の書（企画展示室1・2）

平常展のご案内

四月二十日～六月六日
渡辺崋山と師谷文晁（特別展示室）

六月八日～八月一日
渡辺崋山・椿椿山・福田半香（特別展示室）
芝村義邦コレクション　陶磁器・錦絵・鐔（企画展示室1・2）

八月三日～九月二十六日
渡辺崋山と師谷文晁（特別展示室）

八月四日～九月二十六日
田原城の歴史Ⅰ（企画展示室1）
渡辺小華の花鳥図（企画展示室2）

九月二十九日～十一月十四日
渡辺崋山・椿椿山・渡辺如山（特別展示室）

企画展　5月1日～5月30日
　　9月29日～10月31日
観覧料　一般三〇〇円（二四〇円）
　　小中生一〇〇円（八〇円）
平常展　4月20日～4月30日
　　6月2日～9月26日
観覧料　一般二〇〇円（一六〇円）
　　小中生一〇〇円（八〇円）
（　）内は二十名以上の団体の料金
毎週月曜日は休館
6月1日・9月28日は臨時休館

田原町博物館友の会会員募集中
申込場所　博物館受付
入会申込書に十一年度分会費千円を添えてお申し込みください。
特典
視察研修に参加できます。
博物館だよりを郵送します。
展覧会・催し物のお知らせ
ボランティア活動

(財)崋山会から

崋山・史学研究会会員募集中
申込場所　崋山会館
毎月第四土曜日研究会
視察研修に参加できます。

崋山会報　第二号
平成一一年三月一一日
編集発行　財団法人崋山会
理事長　白井孝市
事務局長　中神洋一
〒四四一―三四二一
愛知県渥美郡田原町田原巴江一二の一
FAX TEL　〇五三一二・二・一七〇〇
〇五三一二・二・一七〇一

編集・協力
田原町博物館
館長　鈴木啓之
副館長　加藤　均
係長　寺田博隆
学芸員　鈴木利昌　天野良枝
崋山・史学研究会
会長　渡辺亘祥
林　和彦　尾川新一
山田哲夫　我部山正
林　哲志　小川金一
柴田雅芳　増山禎之
加藤克己　中神昌秀
崋山会・理事
福井半治　小澤耕一
大羽　敏　加藤寛二

※崋山会報ご希望の方は崋山会館・田原町博物館にお申し出下さい。
次回発行予定　一〇月一一日